

# 門 っ け

三味線を携へて七八つの男の子に手を引かれた女が私の家へ歌を歌ひに來た。彼女は農夫のな  
りをして、頭に青い手拭を巻いてゐた。醜かつた、そしてもとよりの醜さが残酷な瘡癩に襲はれ  
たために一層ひどくなつたのであつた。子供は版にした流行歌の一束をもつてゐた。

そこで近所の人々は私の表ての庭に集まつて來た、——多くは若い母親や背中に赤ん坊を負う  
た子守だが、爺さん媪さん——近所の隠居達——も同じく來てゐた。それから又つぎの町角にあ  
る帳場から車屋も來た、そしてやがて門の内にはもう餘地がなくなつた。

女は私の入口の階段に坐つて、三味線の調子を合せて伴奏の一節を弾いた。そこで一種の魅力  
が人々の上に落ちた、そして彼等は微笑しながら驚いてお互に顔を見合せてゐた。

即ちその醜い不恰好の唇から奇蹟のやうな聲、——若い、深い、透るやうに妙なところ、は名  
状のできぬ程の感動を與へる聲が流れたりさざなみをうつつたりして出たからである。一人の見物  
は『女か、それとも森の仙女か』と尋ねた。只の女であるが、甚だ甚だ偉大なる藝術家である。  
その樂器の取扱ひ方は最も熟練なる藝人をも驚かしたであらう。しかし、こんな聲はどんな藝人

からも聞かれた事はなかつた、そしてこんな歌も。彼女は只農夫が歌ふやうにしか歌はなかつた、恐らく蟬や藪鶯から習つた聲の節で歌つた、そして西洋の樂譜に決して記された事のない聲の細い、又その半分程の細い、その半分の半分程の細い調子で歌つた。

そして彼女が歌つて居ると、聞いて居る人々は黙つて泣き始めた。私には言葉の意味ははつきりしなかつた、しかし私は日本生活の悲しさと樂しさと苦しさが彼女の聲と共に私の心へ通つて行くのを覺えた、——決してそこには何物かを悲しげに求めながら。目に見えない哀れさは私共の周りに集まつて震へて居るやうであつた、そして忘れられた場所と時間の感覺が、——人の記憶にある場所や時間の感情でない、もつと靈的な感情と混つて靜かに歸つて來た。

その時私はその歌ひ手は盲目である事を見た。

歌が終つた時私共は女を誘つてうちへ入れて身上を聞いて見た。昔は彼女のくらしが相應によかつたので小さい時に三味線を習つた。小さい子供は彼女の倅であつた。夫は中風であつた。彼女の眼は瘡癩のためにつぶれた。しかし彼女は強壯で遠くまで歩く事ができた。子供が疲れて來るといつも彼女は背中に負うてやる。彼女は床についた夫と又子供とを養つて行かれる、それは女が歌ふ時、きく人は泣いて彼女に小錢と食物を與へるからである。……彼女の身上話はこんなであつた。私共は彼女にいくらかの金と食事を與へた、それから子供に手を引かれて彼女は去つた。

私は近頃の心中に關する流行歌『玉米竹次郎の悲しき歌、作者大阪市南區日本橋四丁目十四番屋敷竹中よね』と題する物を一部買った。それはたしかに木版であつた、そして小さい繪が二つあつた。一つには若い男女が一緒に歎いて居るのを表はし、他方は『終りの繪』のやうになつて、机、消えかかつた燈火、開いた手紙、焼香、死人へ供物をする佛式に用ひられる聖い植物、櫛しんみのさしてある花瓶を示してあつた。たてに書いた速記のやうに見える妙な草書は、譯して見ると只こんな物になつた、

『評判名高き大阪の西本町一丁目——心中話の哀れさよ。』

『十九歳の玉米を、——見て戀をせし若き職人竹次郎。』

『二世も三世も變らじと誓ひし二人、——遊女を戀ひし悲しさよ。』

『互に腕に彫りしは龍と竹の文字、——浮世の苦勞をよそにして。……』

『女の身代五十五圓を拂はれぬ、——竹次郎の心の切なさよ。』

『この世で添はれぬ兩人は、共に死なんと誓する。……』

『回向を朋輩に頼みしのち——露と消え行く二人の哀れさよ。』

『死ぬ人々の誓する水盃を取り上ぐる。……』

『心中する人の心の亂れ、——空しく消ゆる命の哀れさよ』

要するに話には何も甚だしく變つた事はない。詩に著しいところは少しもない。その演奏の感嘆を博したのはその女の聲のためであつた。それにしてもその歌ひ手の行つたずつと後まで、その聲が未だ残つて居るやうであつた。——不思議な聲の祕密を私は説明しようとしなくて居られない程、不思議な快感と悲哀感とを私の心に起させながら。

そして私はつぎに書いた事を考へた、——

凡ての歌、凡てのふし、凡ての音楽は只感情の原始的な自然の表現の或進化、——音楽によつて表はされる悲哀、喜悅、激情の自然の言葉に外ならない。外の言葉に變化のあるやうにこの音の結合の言葉にも變化がある。それ故私共を深く動かす音曲は日本人の耳には何の意味もない、そして私共に少しも觸れない音曲は青色と黄色と違ふ程、私共と違つた精神生活をもつ人種の感情に力強く訴へるのである、……それでも私に分りもしないこの東洋の歌が、——この下層社會の盲目の女のありふれた歌が、——外國人である私の心に深い感動を與へたのは何の理由であらう。必ずこの歌ひ手の聲に一人種の經驗の全體よりも大きな物、——人生程廣い物、そして善惡の知識程古い物に訴へる事のできる性質があつたからであらう。

二十五年の前或夏の夕、ロンドンの或公園で一人の少女が誰か通りかかりの人に『お休み』と云つて居るのを聞いた。只その『お休み』と云ふ二つの小さい言葉だけ。その少女は誰であつた

け　　つ　　門

か私は知らない、私は彼女の顔を見もしなかつた、そして私はその聲を再びきかなかつた。しかし今もなほ、一百の季節の過ぎ去つたあとで彼女の『お休み』を思ひ出すと快感と悲哀感との不可思議な二重の刺戟を感じる、——疑もなく私のでなく、私一生のでなく、前生の、前世世界の快感と悲哀感とである。

けだし、こんなに只一度きいた聲の魅力となつて居る物はこの世の物ではない。それは無限無数の忘れられた人生の物である。たしかに全く同じ性質をもつた二つの聲はなかつた。しかし愛の言葉のうちには、凡て人生の幾千億の聲に共通なやさしい音色がある。遺傳の記憶によつて生れたての赤子でもこの愛撫の調子の意味がよく分る。疑もなく、同情、悲嘆、哀憐の調子に關する知識もそれと同じく遺傳である。そしてそのわけで、極東のこの町に於ける一人の盲目の女の歌が西洋の人の心にも一個體よりもつと深い感情、——漠然たる物を云はない忘れられた悲哀の情、——覚えてゐない時代のおぼろげな愛の衝動、——を起させるのであらう。死人は決して全く死ぬと云ふ事はない。死人は疲れた心臓、忙しい頭腦の最も暗い小さい室に眠つて居る、そして稀に彼等の過去を呼び起す或聲の反響によつて目をさますのである。(田部隆次譯)

A Street Singer. (Kokoro.)